第一編　明治維新と神奈川県

©神奈川県立公文書館

©神奈川県立公文書館

第一章　神奈川県の成立

第一節　変革期の相武

一　本県成立の特異性

神奈川県名の由来

今日の神奈川県の管轄区域が最終的に決ったのは明治二十年代の中ごろのことで、明治元年（一八六八）に神奈川県の原点ができてからおよそ四分の一世紀の年月を経過している。日本史の全般からするとこの期間はまさに明治維新の仕上げの時代であって、王政復古による新政府の成立から、版籍奉還、廃藩置県、さらにその後も全国各府県の所轄区域調整のための郡県の廃合がしばしば行われ、それがほぼ終わり、全国が一道三府四十三県となったのが明治二十年代のはじめである。神奈川県の場合は、その後さらに三多摩の東京府移管によって県域が最終的にきまった。

このような明治以降の県域の変遷は、政府の地方政治整備過程の一環であるが、本県成立の由来は別格で、これは幕末史の本流と密接な関連をもち、その初期を画した嘉永・安政の開国に端を発しているのである。つまり、安政末年の横浜開港がそれであって、この開港と貿易の開始が因となり、また果となって幕府勢力の漸次後退となり、逆に朝廷とそれをめぐる反幕諸藩の動きが活発化して、最後に大政奉還から幕府の倒壊、王政復古となった。そこに至るまでの幕末の横浜は、日本の中心的

©神奈川県立公文書館

開港場として列国外交団の根拠地ともなり、しばしばこの激動の歴史の表舞台になっていた。

開設当初の本県管轄区域の変遷が、旧神奈川県を中心として周辺旧藩領を合併する形で行われたのは、横浜の政治的、経済的重要性からきていることはいうまでもないが、それではなぜここが、「横浜県」とならずに「神奈川県」となったのであろうかというと、これは横浜港が神奈川奉行の管轄下にあって、実は神奈川港であったからである。これはもとより、安政五年（一八五八）の「日米修好通商条約」によるものであったから、本県の県名は安政の開港期にさざしているということになるのである。このときの条約では新たに神奈川・長崎・新潟・兵庫の四港が開港場となった。このほかすでに開港していた下田・箱館があるが、下田は神奈川開港六か月後に閉鎖して神奈川（横浜）がこれに代わった（第三条）。この五開港場（このうち新潟のみは明治後に持こされた）の地名が後にそのまま県名に用いられて、神奈川のほか「長崎」が長崎県、「新潟」が新潟県、「兵庫」が兵庫県、「箱館」が一時箱館府（あるいは箱館県）となっている。長崎・新潟の場合はそれぞれ県庁所在地が旧来の開港場となったので、そのまますんなり県名となったが、神奈川県と兵庫県の場合は特別であって、前者の場合は前述したような事情であり、兵庫県の場合も神奈川県の場合と同様、条約上では古来の「兵庫津」であったが、慶応三年（一八六七）末、いよいよ開港に当たって兵庫側で外国人居留地開設を嫌い、湊川をへだてた神戸村、二つ茶屋村・走水村辺に設けたので兵庫開港が事実は神戸開港となった。しかし 県名は神奈川県の場合と同様、条約面のまま兵庫鎮台、兵庫裁判所さらに兵庫県となった。

横浜開港

東海道筋の神奈川宿から西方約七キロメートルの寒村の横浜村が開港場横浜となったのについては、日本の開港史の劈頭（へきとう）を色どる幕府外交成功の一幕があった。安政五年（一八五八）の「日米修好通商条約」で定められた神奈川は東海道筋の神奈川宿のことであるが、このような諸大名以下、武士・町人の往来のはげしい場所に開港場を設け、多くの外国の役人・商人が居留し、また諸外国の船艦が頻繁に出入りすることは、外国人との接触をまだ極端に忌避する風潮のつよ

©神奈川県立公文書館

かった折りから、はなはだ危険きわまりなかった。そこで、神奈川開港は不適当ということになって、大老の井伊直弼が神奈川宿開港に異議を唱え、神奈川は遠浅で船着きが悪いことを理由とし、投錨地としてよりすぐれた近隣の横浜村を開けと主張した。これは、外国側に対して横浜も神奈川の一部であると釈明すればよいという論法であった。これに対して条約締結の全権であり、外国奉行の岩瀬忠震らは条約違反と反対したが、大老の威力で横浜開港に決して、開港期日を前に急拠横浜開港の準備にとりかかった。

ところがアメリカの駐日総領事ハリスは、これに強硬な異議を唱え、横浜は不適当と主張して議論が紛糾したが、幕府側は苦肉の策でそれにかまわず横浜開港の準備をすすめ、半ば強制的に江戸商人らの横浜誘致を行った。これが成功して外国商人も横浜に設けた居留地に集まるようになったので、幕府の工作どおり横浜開港となった（肥塚龍『横浜開港五十年史』上巻、『横浜市史』第二巻第三章）。

井伊大老の神奈川開港反対は、攘夷的な排外精神からであったというが、ともかく、このとき若干でも幕府が条約規定の変更を押し切ったことは、今日の横浜市の隆盛を現出せしめた原点ともいうべく、たしかに幕府側の英断のお蔭であったといえよう。当時横浜運上所の通弁を勤めていた福地源一郎は、『懐往事談』のなかで「此選地の英断は実に価値ある英断にして、今日に於けるも横浜の隆盛なるは全く此英断の結果なれば、歴史を論じ貿易を論ずる輩は、敢て此英断の苦心を忘却する可からざるなり。若し当時幕府の当局者が外国全権の威権に怖れ、条約の文字牽制せられて神奈川駅を開港場に定めたらんには、外交上に幾許の禍難を蒙りたらん乎は測り知り難かるべし。其上に今日の（横浜）隆盛は決して夢にだも想像し得べからざりしや言を俟たずして明白なるべし」といっているのは当をえた論評ということができるであろう。条約どおりの神奈川開港の結果いかんは別として、この際、幕府当局が条約規定を曲げて解釈して、強いて横浜開港を推進したことはひとり横浜市のた

©神奈川県立公文書館

めのみならず、神奈川県の歴史にとってもきわめて重要な意味をもつものといわなければならない。

神奈川奉行の設置

神奈川奉行は安政六年（一八五九）六月、横浜開港に当たって設置されたが、これは外国奉行の兼任としてまず同奉行の酒井忠行・水野忠徳・村垣範正・堀利熙・加藤則著の五名が任命された。奉行役宅は戸部村の野毛坂わき宮ノ崎（現在 西区宮崎町）に設けられ、さらに運上所が（現在 神奈川県本庁舎、中区日本大通り）に設けられた。この神奈川奉行の設置に当たって旗本領であった横浜・太田屋新田・戸部・野毛の四か村は幕府の直轄地に編入されて神奈川奉行の預所となった。また、神奈川宿も同様その預所に編入された（『横浜市史』第二巻第三章）。神奈川奉行は遠国奉行であるから一般遠国奉行なみの民政をも扱ったので、これは戸部役所で行い、運上所は後の税関であって、もっぱら貿易その他渉外の事務を扱った。神奈川奉行は遠国奉行とはいえ、開港所管理のために特設されたものであったから、運上所のほうがとくに繁忙であったという。

神奈川奉行は兼任制であったから交代勤務とし、一年交代で一人ずつ在勤し、ほかに一名が随時出向くことになっていた。配下には支配組頭が八、九名いたが、大部分が運上所詰めであった。神奈川奉行を外国奉行の兼任制としたことは、江戸に近いということもあったであろうが、横浜港が江戸の開港場であり、幕府外交の場として江戸幕府の分身にほかならなかったことを示している。神奈川の一部として横浜を開港したが、条約上ではやはり神奈川開港であって横浜開港ではなかった。そこで管理機関を設けるに当たっても横浜奉行とせずに神奈川奉行としたのである。

幕末開国後の横浜（神奈川）は日本の対外的表玄関であり、経済・外交・軍事等の渉外諸事項の中心地であった。当時の国際関係は周知のとおり諸外国の圧力に動かされてはじまったものだけに朝・幕・諸藩、さらに在野のいわゆる草莽・農商民の反応は複雑で、その間から広汎な尊王攘夷運動がまきおこったのであるが、この攘夷運動の波を正面からかぶったのは貿易の中

©神奈川県立公文書館

心地である横浜であった。この波は外国人の殺傷事件となってあらわれたが、その第一回犠牲者は開港直後の安政六年（一八五九）六月、横浜上陸のロシア軍艦乗り組み士官と水夫であった。しかし横浜にとって政治的に重大事件となったのは、文久二年（一八六二）八月の神奈川宿に近い生麦で、江戸から上京途次の薩摩藩の島津久光一行がイギリス商人一団を襲った、いわゆる生麦事件である。横浜居留地は多大の衝撃をうけ、イギリスからのきびしい責任追求となって幕府は償金十一万ポンドを支払った。このようなことで攘夷熱はいやがうえにも高まって、ついに翌三年の九月ころには、横浜鎖港問題がおこり、幕府はいよいよ窮地に陥って、ついに同年末、その談判のために池田筑後守長発を欧州に派遣したが、これは無謀な交渉であったからもちろん失敗に終わっている。このような幕末外交の波瀾のなかで、横浜が諸外国の外交上・軍事上の基地であったことは終始変わっていない。それに伴って幕府側にとってもこの地がやはり対外折衝の基地となった。そういう点で幕末外交史上における横浜の地位は何といっても中心地的である。これは内政史上でなく、主として国際史上におけるものであるが、このような特別な地位が、明治以降の日本の近・現代史上における神奈川県の優位の基礎となっていることも特筆しておかなければならないことである（資料編10近世(7)海防・開国、資料編15近代・現代(5)渉外）。

創設当初の神奈川県

本県史のいわば、本史に当たる近代・現代は、明治元年（一八六八）九月二十一日の神奈川県設置を起点としている。この神奈川県は行政上からいうと、神奈川府の改称であり、神奈川府はまた明治元年四月二十日、新政府によって開設された神奈川裁判所の後身である。この四月二十日、京都から派遣の東久世通禧横浜裁判所総督が、旧幕府の水野、依田両神奈川奉行から事務一切の引渡しを完了したのであるから、新政府の神奈川県政の発足は、この日まで遡らなければならないが、「神奈川県」の名称を唱えたのが、九月二十一日なので、本県史の近代編は、この日を起点とすることにしたのである。

©神奈川県立公文書館

旧幕府の神奈川奉行は、遠国奉行でありながら、開港場の渉外事務官という特殊な性格を持ち、貿易事務管理の財務官でもあった。神奈川裁判所はそういう性格を引継いだ関係から、他府県とは違って長官には、最初に外国事務総督、つまり新政府の外務長官であった旧公卿の東久世通禧また初代知事にもやはり外交官僚の寺島宗則が就任しておって、地方事務のほかに国全体の外交事務にも当たっている。つまり県長官兼政府の外務長官であった。したがって県庁機構も、内政外政の両局を設け、翌二年の東京遷都頃までは、地方事務は従で、渉外事務のほうが主であったというような関係にあった。これは政府の外交体制がまだ不整備の状態にあった関係から、中央の外交担当官が横浜港の渉外事務を兼ねるという行政体制となったのである。当時の政府所在地の京都、大坂より、横浜が幕末以来の伝統から依然日本外交の本舞台であった。このような神奈川県の特異性は漸次解消され、明治四年十月、廃藩置県を機会に関税事務を大蔵省に移管して、神奈川奉行以来の特殊性から脱皮して、他府県なみの地方行政区となった。

二　横浜の繁栄

府県列順

神奈川県は、明治四年（一八七一）の廃藩置県後、諸県の廃合が一応終わった十二月十日に定められた「府県列順」によると、東京・京都・大阪の三府に次ぐ諸県の筆頭となっている。これは諸県の順序を定めるについて、神奈川県以下開港場のある数県を最初にあげたためであった。開港場重視のためであるが、そうなると筆頭はどうしても横浜港を擁した神奈川県となるのであった。この諸県順位は現在まで変わらず、本県は依然筆頭県なのである。このような本県の高順位は明治初年の開港場としての高い地位によるもので、これは全く安政の横浜港開場以降の外交・貿易上の中心地として

©神奈川県立公文書館

の繁栄によるものであったことに由来しているといっていい。

鎖国時代には京都、関東から遠隔の長崎を開港場としたが、幕末の開国開港からは情勢が全く一変して、江戸に近い関東の横浜がかつての長崎に代わって日本の外交関係、貿易関係の中心地となった。明治となっても、江戸が東京と改称して新首都となったために横浜の地位は変わらず、幕末期の繁栄がそのまま存続されて、新しい国際日本の表玄関となった。さらにその後、明治中期から大正へと日清・日露の両戦役をてことした向上期日本の国力増伸、貿易の拡大、それによる国際的地位の向上とともにその名声も高まって世界のYOKOHAMAとなった。

貿易の中心　安政六年（一八五九）六月、開港当初の横浜港は外国船の入港するものもわずかで、まだ港としての設備も不完全きわまる有様であった。前掲福地源一郎の『懐往事談』にも、開港当時の模様について「開港の初は我も彼も相互に目的なく、さながら盲捜しの景色にてありき。当時横浜には本町通り、弁天通りの二筋に各商店を張り、漆器、陶器、銅器、小間物、反物等の店を思ひ思ひに陳列したるは、今より顧れば恰も勧工場の景色なりき。而して外国商館とても是に同じく、毛織物、毛織雑織物、又は小間物等を何くれと無く陳列して以て日本人の需を俟てること、西洋勧工場に異ならざりき……」と書いている。当初に開店した者には、奇利をねらった冒険商人も少なくなく、互に暗中模索の有様であったが、半年ぐらいすると外国側から、将来は有望な貿易港になろうという見通しもたてられるようになった。

幕末の開港場として、実動していたのは、横浜と長崎・箱館の三港であった。条約上ではこのほかに兵庫と新潟があったが、兵庫（神戸）は開港がはなはだ遅れ、新潟は不開港に終わった。そこで、右の実動三港を比較してみると、開港の当初の安政六年を除くと、横浜が輸出入ともに、その金額が圧倒的に他の二港を凌駕（りょうが）している。さらに輸出入品についてみても、主要輸出品である生糸は、横浜がほとんどその全部を輸出している。これはその重要原産地の関東から奥羽の南部中部を背後に持

©神奈川県立公文書館

っていたからであるが、これは貿易上における横浜の比重を圧倒的に重くしている。茶の場合も同様である。このような地理的好条件のほかに何といっても横浜はいわば首都江戸の開港場であったから、日本の対外的表玄関となり、最初から各国の領事館などもおかれ、貿易のみならず、外交事務も行われていた外交都市でもあった。また各国軍隊駐屯、そのほか、前記のように軍艦の寄港などもあり諸外国の軍事基地でもあった。また神奈川奉行もはじめは外国奉行の兼任であったから、横浜の地位は他の開港場とは異なった特別地帯であったのである（前掲『横浜市史』第二巻、石井孝『幕末貿易史の研究』）。

開港場としての特色は何といっても外国人居留地の存在で、これは関門によって区画された日本のなかの異国であった。珍しい風俗の異人が往来しており、彼らのための教会堂もあった。また居留地の異人相手の遊廓も設けられ、ここがまた異国風俗の集約地となった。これらが横浜の新名物として内外人の目をひいて異国的雰囲気（ふんいき）豊かな居留地文化を生んだ。

三　王政復古と相武

大政奉還と王政復古　慶応三年（一八六七）十月十四日、当時京都にいた将軍徳川慶喜は、土佐前藩主山内豊信の建言をいれて大政奉還を行った。これは折りからの薩長連合による討幕運動の攻勢をそらそうとする政略であった。そこで薩長討幕派は討幕の密勅の降下を画策して、慶喜の奉還直後、在京の薩摩藩士小松帯刀・西郷隆盛・大久保利通および長州藩士広沢真臣・品川弥二郎らが、ただちに藩兵の東上を促すためにそれぞれ密勅をもって帰藩の途についた。このような朝廷内外の形勢から両派のはげしい政争となったが、薩長派は芸州藩を抱きこんで挙藩武力討幕の体制を固め、さらに朝廷内の王政復古派岩倉具視と結んでついに十二月九日の王政復古の政変に成功した。

©神奈川県立公文書館

この王政復古は、討幕による新政府の樹立であったから、実質的な政権奪収のために前将軍慶喜に対して官位とともにその領地の提出を求める辞官納地をつよく要求した。ところが慶喜側はこれをいれず、京都を去って大坂城にはいった。薩長両藩を主力とする討幕派があくまで攻勢な態度をとると、慶喜側もこの討幕派と対決の態度にでて、ついに翌明治元年（一八六八）正月の鳥羽伏見の一戦となった。この戦争は討幕派である京都政府側の大勝となって、薩長討幕派の勢力を確固たらしめた。ところでこの討幕派勝利の蔭に江戸における薩摩藩邸焼き打ち一件があったが、これは薩摩藩の西郷隆盛らが幕府側を挑発するための苦肉の策略であったので、この一件の傍流としておこったのが相州荻野山中藩の陣屋焼き打ち事件である。こうして相武地方も一時、この討幕と佐幕両派激突のとばっちりの被害をうけ、さらにその余波ともいうべき小田原藩を窮地に追いこんだ箱根戦争の勃発をみている。

荻野山中藩陣屋の焼き打ち　荻野山中藩陣屋跡は現在の厚木市下荻野で、そこに「山中城址」の碑がたっている。同藩は小田原藩の支藩であって、小田原藩主大久保忠朝の次男教寛を祖とし、はじめは旗本として幕府に仕えたが、宝永三年（一七〇六）、一万二千石の譜代大名となり駿河国松永村に陣屋を設けた。五代教翅（のりのぶ）の時代、天明三年（一七八三）、この荻野に陣屋を移して山中藩となった。幕末期は七代教義が藩主で、一万三千石を領していた（資料編5近世(2)、厚木市教育委員会「厚木市文化財調査報告書」第十一集『荻野山中藩』）。この山中陣屋の焼き打ちは当時江戸薩摩藩邸に立てこもっていた草莽隊の相楽総三（さがらそうぞう）の関東攪乱（かくらん）策の波を被ったもので、山中藩としては全く思わぬ被害事件であった。

相楽総三、本名は小島四郎左衛門将満（しょうまん）といい、下総国相馬郡の裕福な郷士身分の豪農の子であった。生まれは江戸で、相楽総三は草莽運動時代の変名である。幕末期の関東には、水戸の天狗党一派の活躍があり、そのほか、真忠組、慷慨組、天朝組などの草莽隊の挙兵計画があって尊王攘夷の空気が各地に流れていた。総三もこの空気に触れた一人で、若いころ、文久以降

©神奈川県立公文書館

から諸所を奔走し、彼らに資金を提供していた。慶応二年（一八六六）には京都に赴いて、勤王派志士に接近して、薩摩藩出身の浪士伊牟田尚平、益満休之助らと交わり、その縁で西郷隆盛、大久保利通らに知られるようになった。

折りから、薩摩討幕派は土佐の公儀派とにらみ合いの状態でその勝負の決着の機をどうしてつかむかがそのねらうところであった。そこで西郷は江戸を中心に関東攪乱を行って幕府側を挑発し、武力討幕の名目をえようとして、その使命を伊牟田らから紹介された相楽総三に托した。総三はかねて尊王運動の旗上げの志があったのでこの密命を喜んでうけ、慶応三年（一八六七）十月上旬、相楽ら三人は京都から江戸にまいもどって三田の薩摩藩邸にはいった。

相楽総三はこれからこの運動の同志を集めにかかったが、急拠のことであったので江戸ないし周辺から集めた。幹部になったのは落合直亮、権田直助、斉藤謙助、大谷総司などで、隊長相楽の旧知や関東の尊王攘夷派の代表的人物であった。これには江戸周辺の豪農商のつながりもあった。しかし配下としてかき集めたのは江戸周辺の無頼、不逞の徒が多く、その数は五百人に及んだというから玉石混交の雑集団であった。しかも薩摩藩邸を根城としていたから、どうにも幕府側では手がつけられなかった。

この相楽浪士隊の目的は、京都の西郷らから托された討幕目的の関東攪乱であったから幕府側を騒がせればよいわけで、戦略として江戸を中心に関東各地の三地点で挙兵することとして、それぞれ部隊の編制を行った。選んだ三地点とは、第一が野州の都賀郡出流山、第二が甲府城の奪取、第三が荻野村の山中陣屋襲撃であった。十一月の末からそれぞれ行動を開始している。出流山は関東東北部の攪乱で、甲府城奪取は甲州街道の押えであり、山中陣屋襲撃は東海道筋に圧力をかけるためであった。どうして山中陣屋をねらったのかは具体的にわからないが、小田原、箱根方面の襲撃となると容易でないので、まずこの小藩をねらい、さらに作戦を練って小田原方面を襲うつもりであったと思われる。ともかく、こうして相模地方が相楽浪士隊

©神奈川県立公文書館